

日本の電気産業 岩垂邦彦発展基盤を築く

北九州市に隣接するみやこ町豊津の県立育徳館中学校・高校内に岩垂邦彦氏の記念碑が立つ。2009年（平成21年）、同校の前身・小倉小笠原藩学問所「思永齋」創立から250年の記念に合わせ、育徳館出身の彼を称え偲んで建立された碑。我が国の電気通信産業のトップ・日本電気(株)の創立者として今も同社関係だけでなく、多くの人がその偉業に接し、学ぼうとしている。

岩垂、発明王エジソンを師とす

岩垂邦彦は小倉藩土喜田村脩蔵の次男として安政4年（1857）8月、小倉で出生、父の実家岩垂家の養子となり、小倉藩が田川郡香春、さらに豊津へ藩庁を移すとともに行動を共にした。明治2年（1869）、父脩蔵が藩内の争いで暗殺される悲劇に遭った。兄・寛治とともに仇討ちの旅に出たが相手が見つからず、時代はすでに明治となり

出仕。同19年、電気の世界到来を確信して本場アメリカへ留学、エジソン・ゼネラル社に入つて発明王トーマス・エジソンに師事した。同21年（1888）東京の民家に初めて電灯が灯った。この年、大阪でも電灯会社が設立され、岩垂は技師長として招かれて帰国、技術指導だけでなく自ら社会に電気の便利、社会性を広くアピールした。



今も開校当時の面影を残す藩校育徳館の黒門



日本の電気産業発展の礎を築いた岩垂邦彦
(日本電気(株)提供)

「新しい国のために尽くすのが真の孝行」との思いで帰郷して翌3年開校した育徳館へ、さらに分校の※大橋洋学校（行橋市）に入った。明治9年（1876）、東京の工部大学（現・東京大工学部）に入校、ここで電信技術を学び、以後、工部省電気局に

後、独立して個人で電気機器の輸入販売を始め、エジソン・ゼネラル社（G・E社）、ウエスタン・エレクトリック社（A・E社）の代理店資格を得て同31年（1898）、東京で日本電気合資会社を設立した。現在のNECの前身である。翌年、W・E社と資本提携して株式会社化。我が国で初めての外資導入企業で、岩垂は代表取締役専務として経営を主導した。

合理的事業、 経営でNEC近代化

日本電気株式会社経営にあたっては彼の姿勢は変わらない。原価計算制度の導入、親方制度の廃止、タイムレコーダーの採用、

8時間労働制度の導入などによる労務の近代化、社員の海外留学、年金制度、共済組合結成などとその時代としては極めて進歩的で、行いは果敢。生産品も電話機だけでなく鉛皮ケーブル、計器、試験器類など多彩、また有能な技術者を招い



育徳館高校・中学校内に立つ岩垂邦彦記念碑

て無線分野にも研究の手を伸ばした。電話機、交換機などの自社生産だけでなく明治35年には日本で初めて扇風機を輸入し「電気うちわ」として売り出して人気を博し、ほかにも戦後普及した調理、冷暖房、電熱・電力用品の多くを大正時代から輸入、うち一部は戦後、自社生産した。これらの業績を重ねて岩垂は昭和元年（1926）、専務を辞任して新設の取締役会長に就任、3年後、退社。昭和16年（1941）12月、84年の生涯を閉じた。

タートルネード藤田哲也博士の名もある。育徳館高の錦陵同窓会の永岡文彦幹事長によると、創立以来260年の卒業生は約1万6000人。新入生には必ず岩垂記念碑を見せ、学校とNECとのつながりも説明している。また、夏休みの高校生を東京研修でNECや、岩垂が学んだ東京大も見学コースとし、育徳館後輩の小宮豊隆ゆかりの同大の三四郎池などを訪れることもある。同社新入社員が研修で育徳館を訪れることもあるという。

※大橋洋学校とは

明治3年10月、育徳館の分校として行橋の藩主休息所「御茶屋」で開学した。英語、ドイツ語、洋数学などを学ぶ場で、岩垂は育徳館の学業優秀なことから藩から洋学修行を命じられて入ったといわれる。翌4年9月からオランダ人のファン・カステールが講師として教授した。

今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。